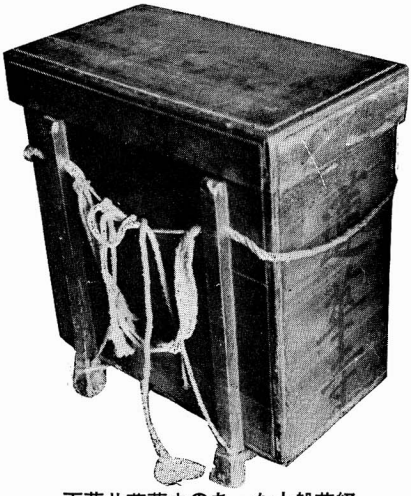
づいてくる紅葉をみるにつけ、感謝をこめて、この郷土の大自然のあたたかいふところを思いやる人も多いであろうと思う。

さえんばをもって昔より自認している当村では、十月十日に、もう菜の年越などといって、かぶや大根を食べる日などといっていたと古老は語ってくれるが、この古老自身これを既に行なっていないらしいから、もう村人は忘れているかと思う。野菜が早く節を切りあげることから起ったのかも知れない。

十二月にはいると、逐次いろいろの神様の年とりがある。これも一年の大役を果された感謝がこめられてのことであろう。まず九日が大黒様の年とり、飯を供えるくらいであるが、平常かて飯を食べつづけていた頃に、白米飯か、なかとり飯を選んで供えるところに、現在の人々ではもう気付かなくなった意識があったように思われる。

今和泉区長宅の3月28日の大般若

十二日山の神の年とり、十五日恵比寿様の年とり、十七日産土神の年とり、十九日馬頭観音の年とり、二十五日納豆の年とり、二十七日煤の年とり、それからはじめてわれわれの年とりになる。歳徳神のお札は多く正月に配って歩いたから、その年



下荒井蓮華寺のあった大般若経を納めた笈